都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

エマオの旅人の心

―芥川龍之介自死直前のキリスト体験―

The Way to Emmaus : Akutagawa & Christian Experience

関　口　安　義
SEKIGUCHI　Yasuyoshi

芥川龍之介が死の前夜まで書き継ぎ、文字通りの絶筆となった「続西方の人」は、次のような文章でもって終わる。

――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

わたしは、これまでしばしばこの箇所のはらむ問題を考えてきた。例えば『この人を見よ　芥川龍之介と聖書』（小沢書店、一九九五・七・三〇）や『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、一九九九・三・二〇）において、なぜ芥川が死の寸前にこのような重い課題を書き残したのかに思いを致したのである。換言するなら、その時点におけるわたしの当該箇所の読みを示したとも言えるし、他方その時点でのわたしの信仰告白が、そこに形を変えて現れたとも言えようか。テクストは読み手とのかかわりで変容する。新しい世紀を迎え、この箇所をいま一度読み直してみたいというのが、本論のねらいである。

エマオへの道

ここで芥川の提起したエマオ途上の旅人の問題をより深く考えるためにも、「続西方の人」の最後の章、「22　貧しい人たちに」の全文を引用しておく。

クリストのジヤアナリズムは貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた。それは勿論天国などに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた為もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。狭い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる為に、――ジヤアナリズム至上主義を推し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲にクリストに対する彼の軽蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

右に述べられていることの内容は、①クリストのジャーナリズムの内実②クリストの一生は我々を動かす③我々の心を燃え上がらせるクリストを求めずにはいられない、の三点に要約できよう。

①はクリストのジャーナリズムが、一種の救済のメッセージとして受け止められていたことを示す。「貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた」は、そのことを物語る。芥川は聖書を熟読していた。それゆえ以下のような聖句は、そらんじていたことだろう。

だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

（「マタイによる福音書」6・31―34、新共同訳聖書による。以下同じ）

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。するとファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』というであろう。言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」（「ルカによる福音書」15・1―7）

芥川はこうした聖書の箇所を想起し、雨の音を聞きながら「続西方の人」の最後の章を書き進めた。彼が自死をする一九二七（昭和二）年七月二十四日の前夜から、東京地方は雨が降り始めていたのである。彼はクリストのジャーナリズムに、人々の心に訴えるものがあるのを確信していた。特に経済的に貧しい人々や当時のイスラエルに多くいた奴隷たちが、クリストのことばによって、いかに慰められたかを見抜いていた。さらにクリストの天才は、彼らばかりか後世の我々をも動かし、そのジャーナリズムの中に何か美しいものを見出していると芥川は言い、②クリストの一生が感動させるものについて言及する。そして「山上の説教」の一部として知られる「求めなさい」（「マタイによる福音書」7・7―8）や「狭い門から入りなさい」（「マタイによる福音書」7・13―14）のたとえをあげる。芥川は「何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。狭い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる」と言いつつも、そのことばにこめられた意味を否定できないのだ。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門を叩く者には開かれる」や「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」のイエスのことばには、冷静な人生の観察者芥川龍之介にとって、一見無理のある論理と映ったことであろう。が、彼には矛盾を超える真実の存在も分かっていた。科学的認識の限界というものを、彼は早くから見抜いていたといえようか。彼の小説や童話には、超自然的な現象を扱ったものがかなりある。また、「きりしとほろ上人伝」「じゆりあの・吉助」「南京の基督」など、彼の愛した「神聖な愚人」の系譜につらなる作品群では、理性では解決のつかないものがあることを、彼は繰り返し書いてきた。そうした立場からも、彼にはクリストのメッセージが、ある面で理解できたのである。

「彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる」とは、イエスのメッセージ理解としてふさわしい。無花果は聖書にしばしば書き込まれ、イエスのたとえ話にも、好んで登場させられた果実である。その無花果の実のように甘い、心にとけ込むことばがイエスのメッセージにはあるというのである。彼はイエスを「実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジアナリストだつた」と言い、その生涯は「我々を動かす」とも言う。芥川のクリスト体験には、贖罪（しょくざい）論やディアコニーの視点を欠くことは、前著『この人を見よ　芥川龍之介と聖書』でも触れたところだ。が、彼の聖書理解の深度は、なまなかのものではない。

「西方の人」および「続西方の人」は、聖書を素材とした人物論であって、小説ではない。そこに一人の人間が聖書をどう読み、理解したかがうかがえるのである。ここで論じられる人物はイエスのみならず、ヨセフ・マリア・ヘロデ・ヨハネ・マグダラのマリア・ユダ・ピラト・カヤパ・二人の盗人など、芥川の批評の光に照らされた人物は、彼一流のユーモアとアイロニーの下に考察される。そこには偉大な存在を前に、疑い迷う人々の姿が歴然としている。四福音書を素材とした芥川ではあるが、中で最も彼が共感を寄せているのは、「ヨハネによる福音書」である。「ヨハネの伝えたクリスト

はマコやマタイの伝へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、荘厳にも優しい」（『続西方の人』2）と彼は言い、そこに見られる人間的一面を高く買っている。

ペトロとトマス

「クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。我々はいつもクリストの中に我々の求めてゐるものを、――我々を無限の道へ駆りやる喇叭（らっぱ）の声を感じるであらう。同時に又いつもクリストの中に我々を虐（さいな）んでやまないものを、――近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう」（『西方の人』18）と芥川は書いている。「現世の向うにあるもの」とは、天国とか神の国を指す。

一方、「近代のやつと表現した世界苦」とは、芥川が生涯かけて自らの文学的テーマとしてきたエゴイズムや虚無や孤独である。ことばを換えるなら「娑婆苦」である。「世界苦」（娑婆苦）の解決は、新興の文学（プロレタリア文学）にも期待できないものであった。彼はいかに理想とされる社会や制度が実現しても、エゴイズムや虚無や孤独や家の問題は残る、との見通しをもっていた。それは若き宮本顕治が「敗北　の文学―芥川龍之介氏の文学について―」（『改造』一九二九・八）で強引に否定しようとした人間にまつわる哀しい現実認識であった。その先には原罪の問題が横たわる。社会主義の世が実現すれば、〈娑婆苦〉は一切なくなるとする若き革命家の理想は美しくとも、芥川の洞察に比べると色あせる。ここに来て芥川は、人間の罪と闘うキリストに無限の共感を懐き、「彼の一生はいつも我々を動かす」と言わざるを得なかったのである。

四福音書を中心に、ルナンやワイルドやパピニを援用しながら展開する芥川の「西方の人」「続西方の人」は、類い稀な人としてのイエスを論じることに終始する。が、その思い、信頼は、揺らぎの連続である。彼はイエスを否定しようとして、結局は肯定することになる。それは二千年前にイエスの直弟子であったペトロやトマスの信仰の行程にもどこか似ている。

ペトロは十二弟子の一人であり、その頭であった。ガリラヤ湖北岸のベトサイダの出身である。その兄弟のアンデレとともに召され、使徒として教育された。が、彼は直情的で、しばしば誘惑に負け、その信仰はぐらついた。その最大の過ちは、十字架直前のイエスを三度知らないとはっきり否定したことであった。イエス逮捕直後のペトロのイエス否定事件は、四福音書すべてが書き記しているが、ここには「ルカによる福音書」から当該箇所を引用しよう。

人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入つた。ペトロは遠く離れて従った。人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれをうち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは

分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。（「ルカによる福音書」22・54―62）

ペトロはイエスの生前、イエスのメシアであることを告白し（「マルコによる福音書」8―29）ていたものの、イエスの逮捕劇の前に動転し、イエスを裏切ることになる。イエスの十字架につまづいたと言えるのである。右の「ルカによる福音書」の箇所は、他の福音書の記事よりも具体的に事件を記している。第一は時間の記述である。他の福音書では「しばらくして」とあるところが、「一時間ほどたつと」とあり、ペトロの三度のイエス否定が、約一時間という限定された時間の中で行われたことが読み取れるのである。第二はペトロの三度目のイエス否定のことばが、「言い終わらないうちに」鶏が鳴き、「主は振り向いてペトロを見つめられた」の一文が挿入されていることである。これはルカ特有の記述である。わたしたちは簡潔に記されたテクストの空所（ブランク）を、それぞれの立場（信仰）から想像力を駆使して充填するのである。イエスの目は非難の目か、憐れみか、悲しみか、愛か……。

他方、トマスも十二弟子の一人であるが、彼は懐疑家で、復活したイエスを当初信じることができなかったのである。彼は他の弟子たちが生き返った「主を見た」と言うと、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」（「ヨハネによる福音書」20・25）とまで言っているのである。しかし、トマスはやがて復活のイエスに出会い、イエスを信じることになる。福音書の記事は以下のようだ。

さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」（「ヨハネによる福音書」20・26―29）

芥川もまたペトロのように、いざとなるとイエスをキリストと告白できずに距離を置く弱い人間であった。また、トマスのように、絶えず疑い迷う、哀れな人間であったのである。それはすべての人間に共通する弱さである。彼は死を前にして、自己の生涯が神の審判に耐えないことを察していた。彼の前には福音書に描かれたイエスがいた。その生に照らす時、彼はおののかざるを得なかった。遺稿の一つ「歯車」の主人公〈僕〉の心情は、そうした芥川の思いと重なる。〈僕〉は「あらゆる罪悪を犯してゐることを信じ」ており、自身の「堕（お）ちた地獄」を感じる。そして「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん」という祈りがおのずと唇にの

ぼるのであった。

芥川はキリスト教を「逆説の多い詩的宗教」（「西方の人」18）と規定した。それはワイルドやルナンやパピニなど先人の解釈に負うところがあるとはいえ、聖書に真剣に対峙してはじめて出る結論である。キリスト教は理性を超えた世界なのである。晩年の小説「河童」には、「若し理性に終始するとすれば、我々は当然我々自身の存在を否定しなければならぬ」とのことばを置き、『侏儒の言葉』にも、「若し理性に終始するとすれば、我我は我我の存在に満腔の呪詛を加へなければならぬ」とある。彼は聖書と必死になって格闘する。その記録が「西方の人」「続西方の人」であった。そこにペトロやトマスのような人間の弱き側面が現れても当然のことなのである。

キリスト教の立場から芥川を論じる日本の研究者は、総じて晩年の芥川にきびしく、論者の信仰の立場から芥川を断罪して終わるという論が多い。例えば佐古純一郎は『芥川龍之介における芸術の運命』（一九五六・四・一〇）で、「福音書を通してイエスの呼びかけを感じることの出来た芥川は、その人格的な呼びかけに対して、人格的な応答をしなかった。彼はイエスの言葉を聴かないでただ聖書を解釈した。そのとき、イエスというひとりの人間が芥川の眼に天才的なジャーナリストとして映ったのである」と論じる。確かにそういう面もある。が、ここには自死直前の芥川は、エマオの旅人の心を共有していたとの大事な視点を欠く。

また、日本基督教団北千住教会牧師をつとめた高木幹太は、「芥川文学における神」（『神と人間』日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九六一・一一・二〇収録）で、「芥川は人間の醜悪・偽善・エゴイズムを誰よりも知っていた」としながらも、彼は「一度も自分を罪人として捉えることをしていない」と極言する。ここには先の「歯車」の主人公の叫びが視野に入っていない。そして「自分の愚に愛想をつかして自殺して行く自分を理由づけするためにイエスを捉えてきて、イエスも俺と同じような気持を抱いて自殺した人間であり、のうのうとして生き延びるよりもセンセーショナルな死を遂げて永遠に人からもて囃されるほうを選んだジャーナリストだった」と言い、「私は芥川を赦すことができない」とまで言うのである。ジャーナリストを、どちらかというと否定的に考えているところに佐古論との共通項がある。が、ジャーナリストとは、言論でもって真実を伝える仕事についている人々の総称なのである。

福音自由教会系の牧師奥山実の『芥川龍之介　愛と絶望の狭間で』（マルコーシュ・パブリケーション、一九九五・二・二五）は、作家出発時からの聖書への関心を芥川に認め、その「求道」の姿はありありと見えてくる」と高い評価を与える。しかし、最終章では、「聖書が伝えようとするメッセージを全然聞こうとしないのである」「芥川は、永遠に救済に対して心を閉ざした」と、これまた晩年の芥川を斬り捨てる。

右にあげた方々は、自身の信仰の立場から芥川を糾明・批判するのである。芥川の立場に立つことのできない論であり、そのジャーナリスト観にも限界がある。むろん伝記研究がいまだ十分でなかった時代のことゆえ、割り引いて考えなくてはならないのだが、それにしても芥川の苦悩を理解する立場を欠く。弱きペトロやトマスを受け入れたイエスの寛容が、これら論者には見られないと言えようか。

復活のイエス

ここで冒頭の一節に戻りたい。「――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう」の背景には、言うまでもなく「ルカによる福音書」の24章13―35の記事がある。それはキリストが処刑されて三日目の夕方、二人の弟子がエマオという村へ向かっている。その時起こった事件を記したものである。

エマオはこの記事によって、キリストの復活にかかわる象徴的な地名となった。今日の聖書学でも、そこはどこか正確に判定しにくいようであるが、エルサレム西方の村であったとされる。芥川が用いた『舊新約聖書 HOLY BIBLE』には、「エルサレムより三里ばかり隔りたるエマヲと云る村」とあり、一九五四年改訳の口語訳聖書では、「エルサレムから七マイルばかり離れたエマオという村」とあり、さらに最新の新共同訳聖書では、「エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村」とある。新共同訳聖書があえて「六十スタディオン」と原語を用いたのは、里やマイルでは正確に言い表せないためなのであろう。「六十スタディオン」というのは、約十一キロメートルほどの距離である。『聖書大事典』（教文館、一九八九・六・二〇）には、Emmausの綴りを示し、「エルサレムの北西ほぼ十一kmの地点にあった」とある。

「ルカによる福音書」には、その時起こった事件、――二人の弟子のキリスト復活体験を簡潔に記している。弟子の一人は、クレオパであったことがわかる。二人はエマオへの道を歩みながら、イエスの十字架上の処刑から埋葬、そして遺体が見当たらなくなったということまで、「一切の出来事」を話し合い、論じ合っていた。そこに旅人の姿をしたイエスが近づき、一緒に歩きはじめるが、二人の目はさえぎられていて、イエスだとはわからない。重ねて言うが、「ルカによる福音書」の記述は、簡略である。イエスは二人の問答に対して、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と問う。二人は「暗い顔」をして立ち止まり、イエスと語り合うことになる。この「暗い顔」の二人の弟子の表情を明るくし、心が燃える体験をさせる復活の主との出会い物語が、ここに展開するのである。聖書の記事に直接聞こう。

その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべて

を信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

弟子たちにとっては、ピラトに鞭打たれ、兵士たちにいばらの冠をかぶせられ、葦の棒で頭をたたかれ、さらには唾を吐きかけられたりして、ゴルゴタの丘へと歩んだイエスの姿は、あってはならない事態であったのだ。そのみじめさ、哀れさを思い返すにつけ、悲しく、「暗い顔」になるのであった。それに対して旅人イエスは、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち」と言い、モーセとすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、イエスについて書いてあることを解き明かすのである。

ここでの二人の弟子は、イエスを三度知らないと言ったペトロ、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と言い、イエスの復活を疑ったトマスと変わるところはない。

日が傾いたので、二人はイエスをひきとめ、宿に入る。一緒に食事の席についた時、イエスはパンを取り、讃美の祈りを唱え、裂いて二人に渡した。すると、二人の目が開け、その方がイエスであることが分かった。が、すぐにその姿は見えなくなるのであった。二人は、復活のイエスに会ったのである。

旅人の心を共有する

復活のイエスに会った二人の弟子は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合ったと「ルカによる福音書」は記す。何度も言うが、芥川はこの記事をふまえて、「――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう」の一文を、「続西方の人」の末尾に書き込んだのである。

イエスを見つめる芥川の目は熱い。芸術への自信喪失、三人の老人（養父母、伯母フキ）を抱えた家庭的悩み、女性問題、それに新時代への不適応と難問が山積していた。それでも健康ならばよい。が、売文生活に入って以来、彼の健康はすぐれなかった。一九二一（大正一〇）年の中国視察旅行以後、状況は悪化の一途をたどることとなる。胃腸病と痔と神経衰弱は、晩年の芥川につきまとって離れることがなかった。最も悩まされたのは、不眠を伴う神経衰弱であった。使用した睡眠薬は副作用を伴い、彼を悩ました。その上徳田秋聲との確執を生んだ『近代日本文芸読本』事件や姉ヒサの夫西川豊の放火嫌疑による鉄道自殺と、少し前から背負いきれないほどの重荷が押し寄せていた。これらさまざまな問題との闘いに、彼は疲れ果てていたのである。その自画像とされる「或阿呆の一生」（遺稿、『改造』一九二七・一〇）の「五十一　敗北」に、彼は次ぎのように書きつけている。

彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は〇・八のヴェロナアルを用ひて覚めた後の外は一

度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だつた。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしながら。

彼の体力は限界に近づきつつあった。そうした時に彼は聖書を通し、「まざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿」（「続西方の人」1）を感じ、「わたしのクリスト」を綴ったのであった。すでに「西方の人」の巻頭に「この人を見よ」の小見出しを立て、「クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない」と書き、親近感を懐いていた芥川は、「クリストの一生」に真剣なまなざしを注ぎ、「続西方の人」を自死前夜に書き終えた。その一生が「我々を動かす」のは、「天上から地上へ登る為に無惨にも折れた梯子」（「西方の人」36）であると芥川は言う。「天上から地上へ登る」とは一見奇妙な言い方に見え、誤植説すら生んでいる。しかし、ここにこそ芥川の真意が込められているのだ。

この一句に込められた意味を近年富岡幸一郎は、「天上から地上へ登る」とは、あきらかに「神が人に成った」という聖書の福音のメッセージに基づいた言葉である。カール・バルトの神学の言い方によれば、それはメシア（キリスト）たるイエスの、人間世界（異郷）への道である。この神の子の人の世界への到来こそ、イエス・キリストの出来事の核心であることはいうまでもない」（『西方の人』（正・続）、『国文学解釈と鑑賞』一九九九・一一）と解釈する。首肯できる見解だ。「天上から地上へ登る」は、復活という出来事を理解する鍵となる一句でもあるのだ。芥川はさらに聖書を読み継ぎ、「ルカによる福音書」24章13―35の記事に至る。

猛暑を洗い流すかのような雨の音を聞きつつ、芥川龍之介はいま復活のイエスに出会っている。彼は二人の弟子同様心が燃えていた。「我々の心を燃え上がらせるクリスト」と書くとき、「我々」の中の一人が自分であることを彼は意識していた。近づくイエス・キリストに、死を直前にした芥川は対面している。いかに人々に痛めつけられ、蔑まれようと、従順に神の摂理を受け入れて十字架上に死に、三日目に甦ったイエス、それは彼にとっては、もはや神話や伝説ではなく、歴史の現実そのものであった。人間イエスや史的イエスは遠い彼方に追いやられ、苦悩する貧しい人間の救い主としてのイエスとの自覚がある。

最近の曺紗玉『芥川龍之介の遺書』（新教出版社、二〇〇一・一二・二五）は、作品の入念な検討と聖書理解の深さから来るユニークな読みで、芥川自死の問題に迫ったもので注目してよい研究である。曺紗玉は韓国の女性の芥川研究家で、ソウルメソジスト神学大学大学院で聖書学を専攻、牧師の資格を持つ。この本で曺紗玉は、芥川が「十字架の話で「続西方の人」を終えないで、エマオ途上の復活したクリストを付け加えた理由はどこにあるのか」の問いを発する。確かに「続西方の人」は「クリストは十字架の上に最も野蛮な死を遂げ」（「続西方の人」21）たことで終わることもできたはずだ。が、芥川は復活のイエスを最終章でとりあげざるを得なかったのである。わたしはそれを「芥川龍之介の信仰告白」と見做したことがある（『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、一九九九・三・二〇）。曺紗玉はそうした考えをも踏まえ、「それは「わたしの感じた感じた」通りの「わたしのクリスト」」（「西方の人」1）ではなく、

まざまざと呼びかけてくる「わたしのクリスト」（『続西方の人』1）であった。ことばを換えるなら、エマオ途上の復活した「わたしのクリスト」の声であった。「貧しい人」であると自覚していた芥川に、「貧しい人」だからこそ入ることの出来る「天国」を指し示す声であり、死ののちの復活をすら示唆する声」としてとらえる。自身の信仰を決して特権化せず、あくまで謙虚に聖書と死直前の芥川の立場を慮った考えである。

福音書はイエスの生前は、弟子たちの誰もがイエスの本質が見抜けなかったとしている。すでに述べたように、後年エルサレム教会の中心人物となり、パウロとともに原始教会最大の使徒とあがめられるペトロでさえ、十字架直前の主を一時間余の間に三度も拒否した。トマスも復活の主に出会う前は、疑い、迷う弱き人間であった。それが復活の主に出会うことで、すぐれた告白をし、祝福に与っているのだ。

芥川の場合も「ルカによる福音書」24章13―35の「エマオの旅びと」の記事に接してはじめて、キリストとの真の出会いが可能となったのである。復活という事件が、懐疑家であり、皮肉屋であり、すべてを疑ってかかる芥川をうち砕き、「我々の心を燃え上がらせるクリストを求めずにはゐられない」という解釈に向かわせたのである。むろんそれは、若き日から聖書に親しみ、聖書が座右の書となっていたという前提があってのことだ。ここに至って復活のイエスは、芥川龍之介にとって他人ではなくなる。先の曹紗玉が『キリスト新聞』の記者のインタビューに答えて、「（芥川は）エマオの旅人のように心を燃え上がらせ、復活の希望を持って永遠の眠りについたと思います」（『キリスト新聞』二〇〇二・三・九）と語るような新解釈もここに生まれても不思議ではないのである。

繰り返すが、狭い福音理解に立つキリスト者の中には、自らの信仰や聖書解釈を絶対視し、「西方の人」「続西方の人」に見られる芥川の聖書理解の奔放さに異端性を嗅ぎ分けて芥川と福音とのかかわりを否定する人が多い。そこに正統的キリスト理解が混在していても顧みないか、端からそういうものを認めようとしないかである。中には自己の信仰や知識を特権化し、芥川を断罪して終わるという貧しい論を書いて得々としている人もいる。少なくとも「続西方の人」の最終章「22　貧しい人たちに」に見られる芥川は、そういう人々よりもイエスに近い。「我々の心を燃え上がらせるクリストを求めずにはゐられない」という芥川のイエス体験は、彼の信仰告白に等しいからである。

付記

本稿は二〇〇二年八月二日、下関マリンホテルで開催された第23回日本キリスト教文学会九州支部夏期セミナーでのシンポジウム、「最後の作品の問いかけるもの」の報告をもとにまとめたものである。